

## 利き手

近藤幽慶

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
清水湧く歌ひはじめに息を吸ひ 夕立や売れ残りたるサイン本 虹消えてクレーの天使とは不眠 噴水や君の心音を知らない 昼寝覚津島修治といふ男 夏の雨碇のやうに栞さし クレヨンの海の濁りや夏の星 指先に微かなる溝熱帶夜 トルソーの胸の平に星涼し 大陸のごときナン裂く晩夏かな 死の後を星の光りてかき氷 花火待つ皆一塊の闇となり 秋近し星座にも誤植のあるか 油絵の地層のごとき酷暑かな ランニングシユーズ履き潰したる原爆忌 空に色預け朝顔しづみけり 秋澄めり雨滴のやうに絵の具垂れ 秋雨に息継ぎのある暗さかな 月光や海のあをなるガラス玉 惑星を探れるやうに桃剥けり 秋彼岸トンネル抜けるまで無言 水差しのくびれやはらか秋の夜 秋の雨異本のごとく遺伝子は 晩秋や画廊の床のぐつと軋み 月は天心聖母子とそれ以外	セーターの中の明るき二日酔ひ 裸木やものを悼むといふこころ その人とゐて外套に煙草の香 日記買ふ遺品を多くするためには マネキンの利き手はどうつち雪催 ウキスキーに翳る氷や虎落笛 三寒四温古本に栞跡 悴むや合鍵の音頼りなく 幾年を母と眠らず寒椿 冬ぬくしここに遊具のあつた気が 留年の知らせ受けて春立ちぬ 水温む直筆のもの少なくて 淡雪は天使の遺灰かもしけぬ 多喜二の忌水に硬さのありにけり 涅槃なり胡坐やうやく渾れきて 陽炎やテントの骨のまとめられ 春泥はしづかな泥でありにけり 日本に桜のありてそよぎゐる 鉛筆の芯の匂へる花曇 フランシス・ベーコンの忌の大欠伸 はるのゆめのはてまでいくところだつた																							

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
火の恋し祈りのやうに書を閉ぢて 冬の灯の搖るるやうなる声の人 紙漉の水の一枚づつ匂ふ 人類は皆夭折や冬銀河 セーターの中の明るき二日酔ひ 裸木やものを悼むといふこころ その人とゐて外套に煙草の香 日記買ふ遺品を多くするためには マネキンの利き手はどうつち雪催 ウキスキーに翳る氷や虎落笛 三寒四温古本に栞跡 悴むや合鍵の音頼りなく 幾年を母と眠らず寒椿 冬ぬくしここに遊具のあつた気が 留年の知らせ受けて春立ちぬ 水温む直筆のもの少なくて 淡雪は天使の遺灰かもしけぬ 多喜二の忌水に硬さのありにけり 涅槃なり胡坐やうやく渾れきて 陽炎やテントの骨のまとめられ 春泥はしづかな泥でありにけり 日本に桜のありてそよぎゐる 鉛筆の芯の匂へる花曇 フランシス・ベーコンの忌の大欠伸 はるのゆめのはてまでいくところだつた																								